



全道展交流紙

2023.02

No.62

## 事務局長就任にあたって

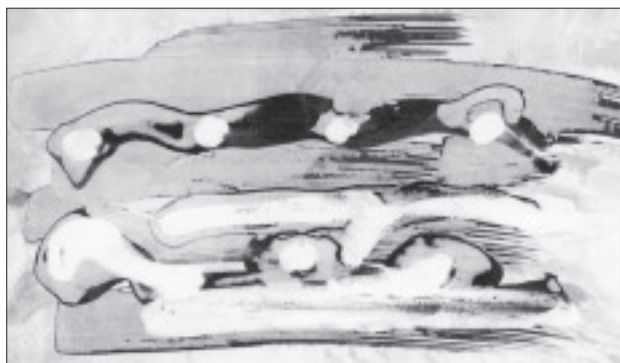
事務局長 川口 浩

昨年秋の事務局役員改選を控えて、前任の田崎氏から事務局推薦で局長就任検討の連絡があった。ここ数年、全道展にとって重要な判断が必要な事案が重なり、田崎氏のご苦勞を一会員として垣間見ていたので、とても私には務まらない職務であると思った。もっと適任で全道展に深く寄与されていらっしゃる諸先輩が何人もいるのに……と。しかし、それぞれご事情もあり、在札で実働できる適齢の会員がいなく、私の名前が上がってきた次第である。

9月の拡大会務委員会は、コロナ禍で中止になり、役員改選の選挙は郵送にて行い、ご承認を頂き今に至っている。完全に役不足で申し訳ない限りであるが、裏方の事務業務のまとめ役と考えることとし、お引き受けした。

あまり真面目に全道展と向き合ってこなかった会員である。実を言うと審査後の会員懇親会には殆ど参加することなく、記念行事にもほぼ参加せず……故、親しくしている仲間もいなく、おまけに酒も飲めず、人付き合いも良い方ではない。温厚そうで実は全然そうではない……そんな自分が嫌でなるべく余計なことを話さないようにしているのだが、つい口を挟んでしまい、その都度落ち込む。この先大丈夫なのだろうか？

迎えた第76回全道展は、3年振りに通常の実施内容で開催できた。計画より1年遅れて学生美術全道展を統合する形で初めて実施された本展は、若い作家の出品が増加し、粗削りではあるが若さと勢いに溢れた作品群は、



+いそしき



従前の展示会場に新たな風景を見せてくれた。しかし、今後検討しなければならない事案がいくつか散見できた。更に広域な高等学校の参加や、学生展に求められた教育的配慮と全道展としてのレベルについて等々、様々なご意見をお聞きしながら順次、より良い方向に向かうよう事務局で努力する所存である。

公募展への出品者が減少している。他団体でも同様だ。昨今は様々な形での発表の機会があり、公募展では自由な表現が出来ないし煩わしいということらしい。作品を創る過程もデジタル機器を使っでの制作で、エスキースはタブレット等で見せてくる。取材はスマホで行い、その撮影写真を資料に使う。それらをPC上で加工して画を作り、支持体にトレースする制作過程である。そうして出来たものが評価されている現状である。これらのことを否定するつもりはない。作られた画像を見ながらヒントを得て、想像力が喚起されることもあるだろう。時代が変われば過程も変わり、道具を有効に使えば良いだけの話なのだろう。しかし、全道展にはそうではない世界が沢山ある。そんな魅力をもっと感じてほしい。とても面白い「公募展」ではないか……。

全道展は、ベーシックな具象絵画から現代の表現様式まで、作品として間違いのない評価をしなくてはならない。そのための「個」としての研鑽は必須なのだ。こう記している私も自戒の日々である。

今まで全道展を支えていただいた諸先輩のご逝去や退会が重なり寂しい限りである。ご指導いただいたこと感謝の念に堪えない。

本当にありがとうございました。

## 第 76 回全道展（2022 年）



会場風景（札幌市民ギャラリー） 6月18日(土)15時



搬入作品 421 点 6月7日(火)  
絵画 349 点 版画 36 点 彫刻 14 点 工芸 22 点



作品陳列風景 6月14日(火)

## 第 76 回全道展表彰式 2022 年 6 月 18 日(土)13 時から



田崎謙一審査委員長の全体講評



最高賞の佐野果帆子さんのご挨拶



## 第76回全道展審査を終えて

### 田崎 謙一（総合審査委員長・絵画部門委員長）

この二年間、全道展はコロナという大変な災厄により作品の公募をすることができませんでした。本年応募された作品の審査を終えて感じたのは、閉塞された二年間の思いが伝わってくる作品が多く、長時間にわたる審査に会員の眼は熱気をおびたものとなりました。

三年前、苫洪の選択で歴史ある学生美術全道展を終了することになり、大作を出品されていた多くの意欲ある学生たちにどうにか発表の場を提供できないかとの思いから、審査のハードルを下げずに一般出品者と同じ厳しい審査を行い、全道展で活躍する作家を育てたいという趣旨で、アンダー 25 の出品者対象に美術館協力会賞と新人賞を新設し、この試みを実行する最初の年となりました。

審査の結果、アンダー 25 以下対象の出品者が協会賞を始め多数の賞を数えるという私たちの期待以上の結果になりました。この背景には 61 年間培った学生美術全道展の純粋な精神が受け継がれていることを強く感じました。

全体を通して、時間をかけた密度の濃い作品が多く、作品のレベルも高く二年間のブランクを感じさせない作品が集まったと感じています。

今年の審査は、全道展に一陣の新たな風が吹いたようなすがすがしさを感じています。



審査風景（版画部門）

併用した作品、奨励賞には釧路知威さん、越智沙織さんの作品が選ばれた。今回の若い世代の入選作の中には、メディウムはがし技法や紙版画という新しい技法の作品もあり、これからの全道展版画部門に新しい風を吹き込んでくれるような期待ももつことができた。各々の版種を追求し、制作し続けてくれることを大いに期待する。

### 関川 敦子（版画部門委員長）

新型コロナ禍の影響で3年ぶりの公募ということで、会員の皆さんとも久しぶりに顔を合わせ、期待をもって審査に臨んだ。

会友は近年退会者が相次ぎ、十四点の出品となった。個々の事情もあると思うが、特に若い世代の退会者が多いのが残念である。

しかし、新会員の志摩利希さん、三浦正志さん、会友賞の佐藤麗子さんは、それぞれ安定した力量でオリジナリティのある作品であった。

一般の入選は十八点。水野房江さん、富田忠征さん、佐々木千晶さんの三名が新会友となり、中でも道新賞も受賞の佐々木さんの木版は技術的にも素晴らしいものがあつた。佳作賞の田中俊二さんは木版とステンシルを



審査風景（彫刻部門）

賞を受賞した高橋ひとみさんは完成度も高い力作でした。受賞や入選された方々、会友の方々の来年の作品を今からとても楽しみにしております。より一層の研鑽に努めていただき、更なる大きな飛躍に期待いたします。

### 水野 智吉（彫刻部門委員長）

3年振りの審査となった今回は、コロナ禍の影響もあって例年よりもやや少ない14名の会員の出席で行われました。搬入された一般出品作品のほとんどは抽象作品でした。具象作品の減少は残念ですが、大型作品や複数出品もあり、コロナ禍でも精力的に制作に打ち込んで来られたことを感じさせるものばかりでした。審査の結果は入選作が6点と厳選となりましたが、その半数が見事受賞となりました。梅田力さんが2年連続の北海道新聞社賞を射止め、斉藤真紘さんと藤沢紀世安さんの奨励賞を受賞されたことがある方々が佳作賞に選ばれました。また、会友は9名の出品でしたが、しっかりと作り込まれた充実した作品が多く見られ、その中でも会友



審査風景（工芸部門）

### 新関 千裕（工芸部門委員長）

2年ぶりの審査。25歳以下の若い方から80歳を超す方まで、実にたくさんの方が力を蓄え、生活に根ざした工芸を芸術に昇華させ、全道展の工芸部門に出品をされたことに、嬉しさとワクワクとした喜びが感じられた審査となりました。工芸部門では出品点数が増えました。出品された作品に1点1点に向き合い、その方の思い、感じたことを汲み取りながら、活発に意見を出し合い、緊張感をもって会員で審査させて頂きました。

受賞者の方の中には継続的に出品され、以前の作品と比べても格段に進歩されていると感心させられる作品もあり、私にとっても学びのある審査となりました。これからも切磋琢磨を期待したいと思います。

精神性の深さを探ることが出来る作品が多数出品されていたと感じた今展。個人的にはこれからの時代は世界の変革が起きると予想しています。

この激変する世界に自問自答しながら自己を表現する場として、これからも全道展に出品されることを強く切望します。

## 新会員の皆さん(7名)



阿部綾子(工芸) 志摩利希(版画) 三浦正志(版画) 鈴木強(絵画) 宇佐美修一(絵画) 松木眞智子(絵画) 太田れいこ(絵画)  
市民ギャラリーにて 2022年6月18日(土)

全道美術協会賞・北海道美術館協力会賞(絵画部門)

**佐野 果帆子**(札幌市)

### ●受賞の喜び●

大学4年生の時にコロナウイルスの流行が始まり、目標にしていた全道展が中止になりました。その後、私は研究生として大学に残り、先生から多くのことを教わりながら自分なりに絵と向き合う日々を過ごしてきました。描きながら、自己評価は低く、賞を獲ることは考えていなくて、最低限あたえられた期限まで満足いくよう描く、という感じでした。何を描いたら良いのか迷う時期もありましたが、4年生の卒業制作から大学構内の室内を題材に描くようになり、それから自分の方向性が見えてきたように思います。この「アトリエと通路」は、自分としてはまだ制作途中だったため、受賞を知ったときは、重たい荷物が急に軽くなって尻もちをついたような気持ちでした。卒業するまで描く予定です。

最高賞をいただくことが出来たのは指導して下さった先生のおかげで、先生と大学には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。在学中ギリギリの時に全道展公募が復活し、美術館協力会賞もいただき、ラッキーだったと思います。そして、可愛がってくれた祖父も天国で喜んでくれているかな、と思います。

## インタビュー

何歳頃から絵の制作を始めたか

美術科のある高校に入って高1で初めて油彩を描きました。

今回の作品で特に表現したかった事

めがねのレンズの厚みで見える両端の湾曲です。

作品制作において上手くいったところ、苦労したところ

上手くいったところは、2枚の絵のバランスです。苦労したところは色の細かい調整です。

制作期間

制作は昨年からの約10ヶ月を費やしました。

全道展に出品した理由

自分の中では、まだ未完成だったため、今回は出品を見送ろうと思いましたが、先生にすすめられて出品しようと決めました。

これからどんな作品を描きたいか

今後も写実画を描き続けていきたいです。



最高賞受賞作品「アトリエと通路」の前で 佐野果帆子さん



## ●受賞の喜び●

今回の出品作を制作し始めたのは2020年2月頃。しかし、コロナ禍の影響で2度展覧会の一般公募は中止となりました。怠惰な私は、それに伴い制作も中断。作品は大凡出来てはいるが、未完というなんとも落ち着かない状態のまま、作品はもはやアトリエのインテリアの一部と化していました。それでも今年、不屈の精神で復活した全道展のエネルギーに触発され、何とかもう一度作品に向き合い、完成させ今回出品することが出来ました。なんとも数奇な運命を辿った本作ですが、これまで、これほど長く作りかけの作品を手元に置いていたことはありませんでしたので、そうなったことで見えてきたものがあったように感じています。

また、この間に改めて自分の制作や生活を振り返る機会があり、思想的には発展した面がありました。この内面的な変化が作品に現れたかはわかりませんが、この長くもどかしかった時間の中でも、自分なりにはもがき、前進した事もありました。もしかしたら、そのご褒美として賞をいただけたのかもしれないと感じています。

昨年、一昨年と開催の中止に関して、運営の方々は断腸の思いであったと思いますし、そのご苦労は一般出品者の私には知る由もありません。私の出来ることは、この賞に満足せず、真摯に制作に向き合い、少しでもいい作品を作る事で、展覧会を盛り上げていけたらと思います。



道新賞受賞作品「相衣性」の前で  
梅田 力さん

## インタビュー

### 何歳頃から彫刻の制作を始めたか

母によると小さい頃、粘土遊びが好きだったそうです。ただ、小学校から高校までは完全にサッカー小僧でした（学部時代も本格的にやっていました）。本格的に彫刻を学び始めたのは、大学3年で彫刻ゼミを選んだ頃（20歳）で、理由は当時のゼミの先生の講義内容が面白くて、そこに惹かれてゼミ選択したことがきっかけです。ですので、面白い講義をしていた先生の専門がたまたま彫刻であったので選んだ事がきっかけという感じです。学部生の時から30代までは絵も彫刻も同じ感じで制作していて、どちらかといえば、絵の方が向いているかもしれないと考えていた時期もありました。

改めて自分の専門分野は彫刻なのだなと思い始めたのは、実は最近で、今の職場（星槎道都大学）で、彫刻や立体系の講義をメインに教えるようになったこと、またそれに伴い、研究も彫刻や立体に関するものが必然的に多くなってきており、そういった外部的な要因が強く影響して、彫刻がメインになってきた気がしています。ただ制作をする時に、矩形の中だけで勝負するのは難しいなと感じていますので、そういった意味では、（私的には）制限が少なく感じる、彫刻の方が向いているのかなと思っています。

### 今回の作品で特に表現したかった事

制作に向かうとき、「概念を彫刻する」という感覚を持っています。頭の中にあるイメージを限りなく排除して、身体のリズムを頼りに制作に向かいます。近年、制作研究を通じて解ってきたことは、私が（無意識のうちに）立脚している哲学は、仏教（特に般若経を纏めた龍樹の中観思想）の「空」の思想に類似しているということです。今回のタイトル「相衣性」とは、全ての存在は、相互に依存して成り立っており、絶対的に存在するものはなく、その本質は「空」とであるという仏教の教えに由来しています。

### 作品制作において上手くいったところ、苦勞したところ

近年、木を制作に取り入れています。木の扱いはまだまだで、かなり発展の余地があります。そのまま残して使う所、手を加える所、自然素材の良さを生かして制作していければと思います。

### 制作期間

中止になった2020年（第75回全道展）へ出品するつもりで制作を始めました。その後2度の中止を受け、今回の展覧会に合わせて仕上げました。実質的な制作期間は（考えたり、寝かせたりする期間含め）3ヶ月程度かと思います。

### 全道展に出品した理由

現在の職場に就任してすぐ、レターボックスに全道展の応募要項・ポスター等が一式入っていて（おそらくどなたかが意図的に入れたと思います）、興味をもち調べてみた所、道内で最も伝統のある展覧会の1つで、かつ多くの彫刻家を輩出している事を知りました。地域に根ざした活動をしていこうと思っていたので、思い切って挑戦してみようと思いました。

### これからどんな作品を作りたいか

彫刻を作り始めて今年でちょうど20年。最近、ようやく自分がやっている事、興味をもっている事、基盤としている哲学的な特徴と言ったものが、一体何なのか、臆けながら見えてきたと感じています。そして、ようやくこの先にありそうな自分の目指す方向も少しだけ見えてきたかなと感じています。この道がどこまで続いているのかはわかりませんが、今の表現をさらに深めて、その先にある景色をいつか見ることが出来ればと思っています。



伏木田光夫会員（絵画）による作品講評



彫刻・佳作賞の齊藤眞紘さん・左 水野智吉会員(彫刻)・右



小笠原実好会員（絵画）による作品講評



佐藤仁敬会員（絵画）による作品講評

## ◆ギャラリートーク◆

絵画 本城 義雄



絵を描く事は見える物をどう解釈するか。リアルさを追求するには、色と形で構成し平面と立体で構図を決定する。

「立体とは空気感で現す」と云うことは空気感を理解し描くことではないかと考える。それを表現するには媒介する物が（モチーフ）である。私の場合は殆んど古い物（骨董、遺物）ですが、これは経過した時間（歴史）の媒介物とも云える。また平面上と立体空間（カタマリ）の中での構図があると考える。

その空間には作者自身の人生感から生れるものでしょう。要約すると作者自身の空気感を描く事になる。

物（モチーフ）と空気との接点（キワ）に何らかの変化を表現できればよりリアルな作品が生れる。

私の場合リアルに描くとは写実を越えた実在感の事、それはやはり空気をより絵画的に解釈して生れるものと思われる。

※化学的に空気を分析するのは可能であるが、絵画的に解釈すると複雑多岐にわたる。モチーフまでの距離＝（空気の厚さ）は輪郭（キワ）が最も遠い。そこに何らかの変化の表現が重要か……

PS（勝手な解釈をお許しを……）



## 版画 重岡 静世



長い間挫折することなく歩んで来ることができたのは、皆様の魅力ある作品に接することが出来たことと、不器用な作品を「味がある」と力づけて下さったり、「美しい空間のために物を描くように」「自分や他人の作品を模写や写真を使う事では伸びない」等、貴重な助言をいただいたお陰と感謝しております。

『重岡静世木版画集—子供たちの未来のために—』を自費出版（旭川「子ども富貴堂」で取り扱っている）

※群来（クキ）：魚が産卵のため沿岸に大群で来ること。特にニシンをいう。

## 彫刻 水口 司



「沖縄の記憶」と銘打って平和をテーマに作品を発表してから16年が経ちました。日本の捨て石とされた沖縄戦から77年たった今も、日本が抱えている課題や問題点が一番顕著に表れている沖縄。しかし逞しく生き抜いてきた沖縄の人々は同時に独自の文化を発展させてきました。私にとっての沖縄は、誤解を恐れず言わせてもらえば、表現したくなるような不思議な力が溢れている魅力的な宝庫なのです。もう少しの間、その力に依拠していこうと思っています。ここ数年、主たる素材が石からコンクリートブロックに変わりました。削っていくと突然現れる穴や形状。ブロックの最大のおもしろさです。ブロックの穴が沖縄のガマやトーチカ・防空壕、琉球石灰岩の穴など多様なものを想起させます。しかしまだブロックという素材の魅力と多様な表情を引き出しきれていません。もうしばらくブロックと対話しながら試行錯誤の日を楽しみたいと思います。

## 工芸 片岸 法恵



今回のギャラリートークでは、困っている時に解決の糸口をもっている人に出会えた不思議さと、初めての世界に誘ってくださる方々との出会いの素晴らしさを伝えたいと思っていました。

私は「緋の着尺の制作」を研究テーマとしていました。

職場の先輩が楽しそうに語る全道展に惹かれ出品しましたが、作品の方向性が違いましたので、出品を続けようか、やめようかと悩みました。

そんな時に講習会で緋のタペストリーも制作している富田潤氏と出会い、更に彼の工房見学に誘ってくださる九州の短大の先生に出会いました。工房に伺ったことで「タペストリー＝太い糸」という自分の中の思い込みを払拭することができました。

置戸コンテンポラリーアートでは、活動に誘ってくださった方や、多くの出品者の方々とも出会い、制作に対する考え方を広げることができました。

そして、制作してきた中で『一番大切なのは、楽しいと感じながら制作すること』という結論にたどり着いたことです。

## 地区だより

全道展道東地区展報告 「根室高校生2名初入選・釧路と根室で地区展開催！」

釧路、根室地区会事務局 宇佐美 修一

根室地区展 8月3日(水)～8月7日(日) 釧路地区展 2022年8月10日(水)～8月14日(日)

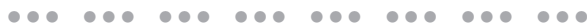


作品を講評する第76回全道展審査委員長の田崎謙一氏

3年振りに道東地区に戻ってきた全道展、コロナの感染が続く中での開催に期待と不安がありましたが、両地区展が無事終了した事が何よりです。

今年の地区展では、釧路から、絵画、加藤三枝子新会友（道新賞）彫刻、斎藤真紘（佳作賞）根室から絵画、宇佐美修一新会員、絵画、柏崎龍男新会友、初入選、釧路1名、根室2名、別海1名と道東地区の躍進が見られたことは大変喜ばしい限りです。特に根室高校の開校以来の公募展初参加の2名の生徒が初入選を果たせたことは、次に続く学生にも大きな力を与えたことは大変うれしい限りです。又、地区展に参加されている方にも学生が参加していることで一般にはない学生が捉えた新しい感覚が垣間見える事でもあります。

釧路から参加の加藤三枝子新会友の広島の実爆ドームを捉えた平和への願いを込めた作品、釧路湿原に命が芽吹く彫刻作品など、見応えがあり、大変好評の展示会であり、さらなる前進をしていただきたいと願うばかりです。学生においては、既に部活動にむかっており本展で同じ学生の作品を鑑賞してきた事が来年の作品制作にどう生かせるのか楽しみな一年でもあります。私自身も自由にさらなる作品制作に、学生と一緒に研鑽あるのみです。



全道展苫小牧地区展報告 「意欲作に出会い感動した！元気が出た！」

苦小牧地区会事務局 菊地 章子

苦小牧地区展 2022年5月17日(火)～5月22日(日)



コロナ禍の最中地区展開催について迷いながらも皆さんのお力で実施できました。昨年は本展が公募中止となり会員と会友のみの展覧会となり、公募展とならずがっかりされた方もおられました。今年度は3年ぶりの公募展開催となり、苦小牧地区展も気を引き締めて開催の運びとなりました。出品内容は会員、会友、一般出品者、初出品者、含めて19名の作品。入場者は昨年をうまわり603名でした。入場された方の声—久しぶりに意欲作（大作等）に出会って感動した、元気が出た—と言う声も多々ありました。このようなコロナ禍での展覧会は現状の生活には欠かせないとも言っていました。地区展終了日に全道展会員の先生がお忙しい中、ご来場頂き個々にご指導いただき大変感謝しております。来年も無事、全道展苦小牧地区展が開催し、いま一步前進し意義ある苦小牧地区展にしたいものです。

ここ数年コロナ禍の影響を受けて「隔絶された中で生きることを余儀なくされた自分」と向き合う日々が続いています。しっかり「自分と向き合い、自分を知る」良い機会でもあり、何を感じ、何を表現したいのか、絵筆を持ちたくなり制作意欲が高まるが、なかなか描く行動に移動できない悩みもあります。社会問題や環境問題としっかり向き合い自由な発想をもちながら、平和な未来を守ることが私達の課せられた義務でもあり、夢でもあります。



全道展室蘭地区展報告 「入場者が増えた！ 出品者は19名 新会員に鈴木強さん」

室蘭地区会事務局 矢元 政行



今年もコロナ禍において、地区展を開催することができたことに深く感謝したい。

この3年間は「展覧会を実施する、しない」で悩んだが、昨年に引き続き今年も8月3日(水)～7日(日)の5日間、室蘭市民美術館オープンスペースで開催することができた。出品者は19名、入場者は273名と昨年より増えた。私は、土曜日の午前中に会場にいたが、昨年と違い入場者が途切れないことに驚いた。地元紙の室蘭民報、北海道新聞の記事を見て美術館に足を運んだ方も多く、絵についての質問や解説で、会場にいる時間があっという間に過ぎた。

今年は、仕事の関係で室蘭から離れていた福井路可さんが退職のため帰郷し、会員に復帰、鈴木強さんが新会員に推挙され、岳上恵子さんが佳作賞を受賞し、飯島孝宣さんが初出品初入選、田中正次さんが版画を出品するなど、冷房が効いた会場に絵と工芸、版画をゆったりと展示、静かにじっくり鑑賞することができた。

今回も懇親会やギャラリートークは中止とした。恒例になっている美術館前での集合写真はマスクをはずして撮ることができた。コロナ禍が早く収束し、展覧会が思いっきりできるようになることを願ってやまない。



## 全道展旭川地区展報告 「つなげていく」

旭川地区会事務局 西村 徳清

「全道展旭川地区展」（7月2～16日）が深川市アートホール東洲館で開催された。出品者は旭川を冠する展示ながらも空知・道北地区を広くカバーし、大作40点。後藤敬子・谷田貝洋子・富田忠征（新会友）、宮下淳（八木賞）、田中俊二（佳作賞）、会田栄喜（奨励賞）、安部聖哉（奨励賞・新人賞）らの新会友・受賞作も並び充実の展示空間となった。

これは長らく渡辺貞之会員と井出運送さん（昨年度をもって全道展の運搬を引退）が旭川から札幌に至る出品作を運搬し、作家をつないできた結果である。地方作家とくに若者にとって、魅力のある作品や作家が光る公募展であっても運搬という現実問題をクリアできなければ出品に心が向かないのである。今後も会員で知恵を絞り合い、出品者の声に寄り添いながら旭川地区を盛り上げていきたい。



## 全道展函館地区展報告 「コロナの閉塞感を乗り越えて、明日へ」

函館地区会事務局 輪島 進一



会期を11月に変更して2年目。この時期の函館はまだ雪も降り積もることもなく、小春日和の日も多くあります。入場者も若干増え、今年は562名となりました。しかし会期直前から、なんとコロナがまた急増し、北海道は第8波を向かえてしまいました。長く出来なかった懇親会を今年こそ、との思いもむなしく、中止に追い込まれてしまいました。函館地区は会員や会友だけでなく、一般出品者も高齢になりつつあります。同じ



地域に住んでいるとは言え、このパンデミックの性格上、なかなか交流を深めることもできなく鬱々とした日々でしたのでとても残念でした。そのような状況でしたが、初日は30名以上の仲間が朝から搬入・展示作業を行い、その後集合写真撮影や総会と、久しぶりになごやかに語り合うことが出来ました。昨年来、大作が多く見応えある会場となりました。

また会期後半に行ってきたこれまでの合評会を“絵画を語り合う会”と名称を変え、ただ単に会員による絵の批評ではなく、制作を続けて行く上でのもっと個人的な悩みや不安をじっくり語り合い、この暗いコロナの時代に前向きに意欲的

に明日へ向かっていこうという思いで設定しました。昨年よりも参加人数も増えました。

来年は本展出品作だけでなく、全員が小品を持ち寄り、展示コーナーを設けて、会場の雰囲気さをさらに盛り上げ、充実させて行きたいと考えています。今後も全員で知恵を絞り合い、出品者の声に寄り添いながら函館地区を盛り上げていきたいと思ひます。



## 全道展十勝地区展報告 「個の集団、全道展バンザイ！」

十勝地区会事務局 今西 直人



森弘志会員のギャラリートーク

第24回全道展十勝地区展が7月28日から8月2日まで帯広市民ギャラリーで開催された。コロナ禍の中であり、消毒検温対策をし、3年ぶりの実地である。心配された来場者も510名の方が足を運んで下さり、心待ちしていた全道展ファンに感謝。地区メンバー20名41点の情熱ある作品が並び“全道展元気だよ”と訴える会場となった。

今回は今年の本展作と2年間札幌で発表してきた「会員会友展」及び「小品展」を中心に展示した。今までの活動もみられ「ちゃんと描いているんだネ」と元気付けられる面もあった。

入選7名、受賞者は3名、作品に触れると確かなデッサン力から独自の世界観を生み出す佐藤真康の絵画（会友賞）、十勝の厳しい冬に温かみある表現を試みた荒井千恵子（工芸奨励賞）、やわらかな曲線の妙を感じさせる保坂順一（工芸新会友）等この土地ならではの作品が会場狭しと並び、十勝のパワーを思わせた。

今回は試みとして森弘志会員のギャラリートークを実地した。これは今後全道展の道しるべ的トークであった。

究極のところ“個”として訴求できる作品をいかに創るかに尽きる。私が50年前初めて観た帯広巡回展、そこでの神田日勝の「室内風景」にドキドキ血が騒いだ。あの頃の感動を今一度求めたい。ふるえる絵に接した時、人は感動し満足する。そこに人も集まる。そんな作品を創ることは我々の使命でもある。

“個”の集団、全道展バンザイ！！



## 作家探訪 新会員 鈴木 強（会友歴 20 年） 室蘭市在住

### 「ピエロに魅せられて」

訪問・撮影 梅津 薫

- 第 39 回全道展初入選「ピエロの休日Ⅱ」から、一貫してピエロを題材として制作が続きますね。
  - ◎小学校時代に街にサーカスが来て、それを見たのが切っ掛け。（色の中でも特に「赤」が好きだという。ピエロの衣装が鈴木さんの色彩感覚の原点かもしれない）
  - 絶えずピエロを描き続けることは、様々な困難があったと思われ、マンネリ化した一時期も見受けられる。周りも本人も、もどかしかったと推測されるが。
  - ◎ある会員の方には「何やってんの!!」と苦言を頂いた。
  - 描画材料はずっと油絵具。
  - ◎ペンキで描いたこともある。職業柄、ペンキは沢山あるので。（私も 20 代後期、ペンキの光沢とヌラッしたマチエールに惹かれて使ったことがあるので、その気持ちはよくわかる）
  - 下地はどのように？
  - ◎建材用のアクリル塗料をローラースポンジで塗って、マチエールを作ってから描いていく。
  - 第 56 回に、いよいよピエロが消え、ジョーカーの登場ですね。あの作品は空間構成、モチーフの組み合わせがよかった。そして、57 回に新会友に推薦となりますね。
  - ◎そうですね
  - またそこから長かったのですが、第 76 回展において、新会員の推挙。この作品はまた原点のピエロに戻って、構成、空間、動性、色彩の 4 拍子が揃った、鈴木さんの集大成となる作品ですね。  
初入選から数えて 38 年です。故佐久間先生ならなんとおっしゃるでしょうね？
  - ◎「遅かったね～」と仰るでしょう。多分その言葉には「なにやってたんだ～」という意味が含まれているような気がします…と、鈴木さんは笑いながら言った。
- 追記：鈴木さんは制作の傍ら、室蘭の文化活動の向上や、カレーラーメンの立ち上げ、ブタキャラの推進（室蘭焼き鳥は豚なので）等、多岐にわたり市に貢献している。



## 作家探訪 会友 桔梗智恵美 滝川市江部乙在住

### 「求めるは時間と空間」

訪問・撮影 梅津 薫



全道展初入選の第 59 回展「Life 04」F 100 号は、ご主人の祖母を描いた重厚な作品。

絵（漫画を含む）を描いているか、本を読んでいるかというような少女時代を経て、油彩画を始めたのは学校の教師になってから。それ以前に渡辺貞之氏のデッサン会「ピープル」に誘われ、ここで描写力が養われていた。（中学では駅伝、高校時代は吹奏楽トロンボーンで活動していた）

彼女の作品には一貫して人物が出てくる。主要テーマかと思って尋ねたら意外な応えが返って来た。

「人物を取り巻く時間や空間を表現したい」

それは絵画における「表現の自由性」を獲得しようとする意志であり、記憶の空間を自由に飛び回り、題材に照射し、キャンバスに定着するのである。その証として、彼女の作品は空間の多重性・コラージュ的構成表現が特徴である。

色調は一貫して抑え目でかなり渋い。ただ一度大胆に赤を使った作品がある。第 75 回展「君ヲナク」180×135 cm は眼鏡をかけた女性の上着がかなり思い切った赤である。このことを尋ねたら「この頃コロナで閉塞感があり、何か打ち破りたかったのかも」「あ、私も色を使えるんだ」。

今後、表現の自由性や色彩の奥深さ、感性のふくらみなど、更なる進展を大いに期待したい。

追記 1. 幼少期、小屋などの暗闇が怖かったという。このことは彼女の制作とも深く関わっているようだが、紙数の関係でここでは触れない。

追記 2. 全道展 66 回展奨励賞、同 71 回展佳作賞、同 74 回展佳作賞、新会友推薦

「行動派 福岡幸一 石狩の地で発信・活動」

訪問・撮影 川本ヤスヒロ

福岡幸一会員（版画部門）は1947年北見市生まれ。2009年石狩市厚田区聚富に移住して、現在海に見える自然豊かな地で創作活動をしている。この地の冬は地吹雪が多いが、春夏秋冬の自然が美しい。

石狩市に来てまもなくの2011年11月、石狩に住む美術家に声をかけ、「石狩美術協会」を立ち上げた。石狩美術協会は昨年、川本ヤスヒロ実行委員長・福岡幸一事務局長を含め会員31名と物故会員2名による創立10周年記念展を札幌大通美術館と石狩市のアートウォームで開催した。また、福岡氏が中心に編集作業を進めた「創立10周年記念誌」も発行した。



新作の制作に励む（福岡氏のアトリエにて） 8月20日撮影

福岡氏が注目されたのは、2016年に札幌時計台ギャラリー全館を使用して「50年をたどる作品展」を開催したことである。札幌時計台ギャラリーA・B・C室を使用して個展を行った作家は数名いるが、D・E・Fも含めて全館を使用して個展をした作家は最初である。1966年から1971年の6年間全道展に油彩画を出品し、1968年から今日まで54年間銅版画を出品している。そこに展示された作品の中には、1966年第21回全道展初出品で奨励賞を受賞した60号「船Ⅱ」の油彩画、1968年第23回全道展で知事賞を受賞した銅版画作品「調理場Ⅳ」（35×30cm）、1988年全道展で会員推挙になった「浜益濃昼Ⅱ」（36.5×73cm）、1995年50周年記念全道展の「冬の張碓碎石場Ⅱ」（50×75cm）、2005年全道展60周年記念企画展の「オウトウー北光（水門）」（40×100cm）、2015年70周年記念全道展の「エピブゾシア」（50×50cm）を含めた200点の作品がある。

2019年に地元石狩市で、いしかり砂丘の風資料館、石狩海浜植物保護センター、市民図書館、市役所の4会場で個展を連続開催し、2020年には、東京神田神保町・文房堂ギャラリーで「北の風土を刻む福岡幸一 銅版画の世界」を開催している。

また、今年4月に『—銅版画で辿る化石図鑑—アンモナイトと恐竜時代の生物』を出版した。アンモナイトの版画は2001年から18年間にわたり、その仕事の足跡を残そうと5年間かけて図鑑を作った。掲載作品総数は317点で貴重な魅力的な作品集になっている。

注：『—銅版画で辿る化石図鑑—アンモナイトと恐竜時代の生物』北隆館より発刊

B4サイズ横開き・上製本 ■ 208頁・総カラー



喜茂別町「ギャラリー杣人」 6月24日撮影



余市町「余市ワイナリーケルナー館」 7月9日撮影

2022年6月は喜茂別町のギャラリー杣人（そまびと）で企画展、7月・8月は余市ワイナリーケルナー館アトリエで「北の果樹展」を開催するなど、精力的な活動は止むことなく続いている。



## 神田一明・日勝展

北海道立旭川美術館  
2021 年 12 月 18 日～2022 年 3 月 13 日



旭川美術館 会場入口

神田日勝記念美術館  
2022 年 4 月 13 日～6 月 26 日



神田日勝記念美術館

『神田一明、日勝展』は北海道立旭川美術館で開催後、神田日勝記念館で開催された。約半年にわたっての長期開催である。1970 年に 32 歳で亡くなった全道展会員の神田日勝の作品は、神田日勝記念館や北海道立美術館で何度も繰り返し見ている。今回展示されている作品の中で、1970 年の「室内風景」は、第 25 回全道展と第 38 回独立展の会場で見えて感動した。その他、1963 年作「板・足・頭」、1964 年作「一人」、1968 年「室内風景」の自画像のある作品が特に印象的であった。神田一明会員は、全道展で毎年、P 150 号の大作を発表しているが、今回の展覧会では 32 点の作品を見ることができた。1976 年作、「静物 A」は心に沁みる最高の作品であった。2017 年作「K 氏の時間」、年代不明の「自画像」、1956 年ごろの「自画像」も魅力的な作品であった。今年 88 歳になる全道展の大先輩の神田一明会員が、今も身近な生活の中から美を発見し追求していくエネルギッシュな姿に刺激を受けるのである。なお、神田日勝記念館では旭川美術館で展示されていなかった 9 作品（日勝、7 作品・一明、2 作品）を見ることができた。（川本ヤスヒロ記）



神田日勝記念美術館 会場風景



神田一明会員の作品（左） 故・神田日勝の作品（右）



## 北海道の美術 1950 年—70 年代

第 2 展示室では、1950 年から 70 年代にかけて活躍した画家の作品 23 点と関連資料などが展示されていた。22 名の作家のうち、一木万寿三、田辺三重松、高橋北修、岩船修三、小野州一、寺島春雄、渡邊禎祥、木田金次郎、難波田龍起が全道展関係の画家であった。

その中で、渡邊禎祥現会員の作品「鋼矢板」1966 年作が展示されていた。（川本ヤスヒロ記）

F 100 号、板に描かれた油彩画（渡邊禎祥作）は写真左  
北海道立旭川美術館 第 2 展示室

## 2022 年の展覧会

### 渡会純价 版画展 音楽がつむぐ わたしの世界～坂井コレクションより～

小川原脩記念美術館 2022 年 2 月 19 日～4 月 17 日



「音楽がつむぐわたしの世界」坂井コレクションよりは、渡会純价会員の 70 点の版画が展示されていた。作品は、「全道展を創ったつわものたち」をはじめ、「森のアンサンブル」「交響曲」、シルクスクリーンの作品「音のメモワール」、エッチングの作品「子供の情景」「にっぽんの童話」などのシリーズである。どの作品も魅力的で、会場は音楽が奏でる自由な空間と色彩が輝く平和な世界が広がっていた。  
(川本ヤスヒロ記)

## 権展

アートホール東洲館

7 月 17 日～7 月 31 日



法邑ギャラリー

8 月 3 日～8 月 12 日



渡辺貞之・通子素描展同時開催

岩見沢市絵画ホール・

松島正幸記念館

2022 年 9 月 2 日～9 月 30 日



梅津薫展同時開催

梅津薫・川本ヤスヒロ・斉藤嗣火・田崎謙一・福島孝寿・藤井高志（故人）・渡辺貞之。この 7 人のメンバーで 20 年あまり、変わることなく毎年 1、2 回のペースで展覧会を開いている。特に共通した主張はもたないが老年期に入りながらも「個の集団」として、势力的に互いの画業を尊重し、妥協のない作品づくりをしている。今年は深川市・岩見沢市・札幌市と招待企画展を開催した。  
(渡辺貞之記)

## アイコン塾展

美唄市郷土資料館 2022 年 9 月 10 日～9 月 25 日



アイコン塾では、梅津薫、田崎謙一会員が中心となり、テンペラ技法で古典絵画技法を追求している。そして、古典技法を学びながら独自の絵画表現を試みている。  
(川本ヤスヒロ記)

## 大井戸百合子展

アートホール東洲館

小樽市立美術館

「北の市場と女たち」

2022 年 9 月 17 日～9 月 30 日

「南のくらしと女たち」

2022 年 12 月 7 日～12 月 28 日



アートホール東洲館



小樽市立美術館

全道展版画部門で活躍しているベテラン作家。

「北の市場と女たち」という命題で 1～2 月にかけて銀座で、9 月には深川市で開催。主に銅版画で市場で働く女性たちの生活や絵本原画を展示。日々をたくましく生きている姿に感動する。

(渡辺貞之記)

12 月開催の小樽展の会場には、50 代に描いた赤道直下の国々のスケッチが展示されていた。パステルで描いたドローイングは鮮やかな色彩で、南国の魅力を感じ取ることができた。  
(川本ヤスヒロ記)



—ふたりの世界観が凝縮された空間に作家魂を感じた 浅川茂展・近藤みどり個展—

## 浅川茂展 「遠い日々の心象 1980-2020 年」

帯広市民ギャラリー A 室（1・2） 2022 年 9 月 15 日～9 月 20 日



95 点の小品は迫力、まさに浅川ワールドである。小品でありながら重厚な絵肌は絵画の精神性を改めて感じた。一点たりとも気のゆるみのない真剣勝負である。この 40 年間の人生縮図とも感じた。「小品展」と聞いたとき、あの広い会場でどんな感じになるのか？それは徒労であった。作品は答えてくれた。

（今西直人記）

## 近藤みどり個展 Artworks [2006-2922] 「静寂の帳。生命の朝。」

帯広市民ギャラリー 2022 年 9 月 29 日～10 月 4 日



150 号クラスの大作 28 点が並ぶ会場は壮観そのものである。この 16 年、彼女の一貫してもとめてきた生命・いのち「アイデア」「クオリア」と題する一連の作品、それは「私はやるんだ、描きたいんだ」との気持ちがあふれんばかり、確かな生きざまをみた。

（今西直人記）

## 高橋靖子展 —油彩、水彩、布に糸のドローイング—

ギャラリーレタラ 2022 年 10 月 13 日～2023 年 10 月 26 日



2010 年、2020 年などの油彩の大作 6 点の他、水彩、ドローイングなどがバランスよく展示されており、高橋靖子会員の世界が会場いっぱいに加わっていた。個々の作品が魅力的であると同時に、展示されている作品群がそれぞれお互いにパワーを発揮してより美しい個展会場になっていた。

（川本ヤスヒロ記）

## 鈴木強作品展 STAGE 室蘭市民美術館企画展

室蘭市民美術館 2022 年 11 月 8 日～2023 年 1 月 15 日

1987 年「STAGE 一夢」（第 42 回全道展入選作・F 100 号）から 2022 年「STAGE 一夢」（第 76 回全道展会員推挙作・S 100 号）まで 33 点の出品である。特に 2001 年「STAGE 一 JOKER」（第 56 回全道展佳作賞作・F 130 号）は、今まで登場させていたピエロをあえて描かず、空間の造形性を重視したよりシャープな画面構成が成功した。2009 年「STAGE 一止まった時間」F 100 号と 2010 年「STAGE 一ふくろう」F 30 号の 2 点は、美しい切ないメロディーが画面から伝わり私の心をとらえた。55 年前、第 9 回学生美術全道展に出品した仲間が今年全道展会員の推挙になり限らない喜びである。



（川本ヤスヒロ記）

## 第 64 回麓彩会展 坂口清一・穂井田日出磨・米澤邦子会員が出品

小川原脩記念美術館 2022 年 12 月 10 日～2023 年 2 月 26 日



1958 年に小川原脩を中心とした当時の後志在住作家を核として始まった麓彩会（ろくさいかい）展は、64 回目を数える今年も個性豊かな作品でいっぱいであった。羽山雅愉会員の「黄昏と小樽」、会友の菊池ひとみ、小島英一さんが出品している。6 月に開催された第 76 回全道展に出品した坂口清一会員の「天空に還る」、米澤邦子会員の「流景」をまたこの会場でゆっくりと鑑賞することができた。

（川本ヤスヒロ記）

## 全道展 第 10 回新鋭展

ギャラリー大通美術館 2022 年 11 月 8 日～11 月 13 日

出品者は 38 名（絵：23 版：7 彫：6：工 2）。出品規定が平面で 30 号以下ということもあって、38 名の出品で賑わった。新鋭展選抜者にとっては出品しやすい大きさである。その反面、観る側からすると、全体的に揃いすぎて少々インパクトに欠ける感じは否めない。

今回の出品作品は、皆、本展に通ずる力作であり、技術的にも安定している。ただこういう企画でこそ、自分の世界を広げる「実験の場」と捉えて、失敗を恐れず新しい試みに挑戦して欲しいと感じた。次回作におおきな飛躍を期待したい。（梅津薫記）



## 札幌のギャラリーから（1 月～12 月分）

### ●ギャラリー大通美術館

- 5 月 光風会展
- 10 月 川本ヤスヒロ展
- 11 月 「3つの個」展

- ・第 76 回全道展に「街の詩」を出品、入選した田中恵子さんが出品
- ・全道展絵画部門会員（自画像・音楽の空間、生と死などがテーマ）
- ・菊地章子・北村葉子・渡辺美智子全道展絵画部門会員が大作を出品

### ●さいとうギャラリー

- 1 月 New Point vol.19
- 12 月 梅田力展

- ・全道展絵画部門会員の會田千夏さんが出品
- ・第 76 回全道展彫刻部門新会友推薦、北海道新聞社賞受賞作家

### ●大丸藤井セントラルスカイホール

- 3 月 久末真紀子展
- 3 月 銅版画二人展
- 3 月 南雲久美子個展
- 11 月 春陽会道作家展（絵画部）

- ・第 76 回全道展に「宙へ」を出品、初入選。個性的な作品が魅力的。
- ・坂みち代（全道展版画部門会員）と佐藤麗子（全道展版画部門会友）
- ・全道展絵画部門会友（長年、銅版画も制作）
- ・全道展絵画部門会友豊島章子・山本周子・小黑雅子さんが出品

### ●道新ギャラリー

- 6 月 ホンマヒロコ展
- 12 月 二人の ATSUKE の版画展

- ・全道展版画部門会員による版画と水彩画展
- ・全道展版画部門会員の関川敦子さんが出品

## ..... 2023 年 第 77 回全道展日程 .....

会 期 6 月 14 日(水)～25 日(日) 10 時～18 時 ※月曜日休館、最終日 16 時 30 分まで

会 場 札幌市民ギャラリー

搬 入 6 月 6 日(火)

審 査 7 日(水)・8 日(木)

陳 列 13 日(火)

授賞式 17 日(土)

搬 出 25 日(日)

出品料 3 点まで 8000 円、1 点追加とに 1000 円、  
※25 歳以下は 2000 円

入場料 当日券 800 円 前売券 600 円  
25 歳以下・障がい者無料

### 全道展情報発信してます

ホームページ



全道展

検索

<http://www.zendouten.jp>



### 編 集 後 記

8 年間、ZEN の編集に携わってきた絵画部の米澤邦子会員が退任されて後、絵画部会員の梅津薫と川本ヤスヒロが担当することになりました。ZEN の発行は、昨年まで 12 月でしたが、今年から 2 月に発行することになりました。コロナ禍の中、3 年ぶりに開催された第 76 回全道展と地区展などを中心に記事を書きました。本誌へのご意見、ご要望をお寄せ下さい。

ZEN 編集部 川本ヤスヒロ・梅津薫